http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.233　03/07/05

矛盾

テレビで「ほこ×たて」という番組があって、「どんな料理も辛くする粉vsどんな料理も甘くする粉」とか、それこそ「どんな金属にも穴をあけられるドリルvs絶対に穴があかない金属」みたいな対決を特集している。司会のタカアンドトシが割と好きなこともあってけっこう見てしまうのであるが、この「たて×ほこ」という番組タイトルが、「矛盾」を元にしていることは、君らなら当然のことながら気づいているに違いない。

「矛盾」という言葉の起こりについては、教科書にも採り上げられていて有名である。簡単に紹介すれば、

> 昔、盾と矛を売り歩く商人がいた。道行く人々に一振りの矛を示して、「これはどんな強固な盾でも一瞬で突き破る鋭い矛だ」と自信を持って見せつける。次に盾を取りだして、「これはどんな鋭い矛でも防ぐことができる強固な盾だ」とこれまた自信満々に宣伝する。と、それを見ていた男が商人に質問した。「では、その鋭い矛で強固な盾をついたらどうなるのか？…」

というわけだ。だが、この話には深い背景がある。こちらは引用して紹介しよう。

＊

戦国時代の思想家・韓非(前280？～233？)の著『韓非子』にみえる有名なエピソードである。

「矛」とは攻撃して相手を刺し貫く武器、「盾」とは矛の攻撃から身を守る武具である。当然のことながら、「すべての盾を破る矛」と「すべての矛から守る盾」が同時に存在するはずがない。「矛盾」という言葉はここから生まれた。

当時、中国では孔子（前552？～479？）を祖とする儒家が一大勢力をもっていた。韓非は、人間の性質は生まれつき悪であると考える性悪説を唱えた荀子（前298？～235？）に学んだことにより、儒家の政治論に疑問を抱くようになった。たとえば、儒家が聖王として尊崇する堯・舜・禹は比類なき人格者であり、理想的な君主とされる。堯は徳によって統治し、その後継者である舜は天下を視察して、漁民の争いを調停したり土器の製法を改良したりするなど、さまざまな改革に取り組み、民の教化に努めた。

しかし、韓非はそこに儒家の欺瞞を感じ取った。なぜなら、もし儒家のいうように堯が聖王であり、聖王による統治が行き届いているなら、有徳者の教化された民に争いなどあるはずがない。ところが、現実には調停者が必要な争いや改革すべき点がたくさんある。韓非は、この現実こそ堯の聖性が偽りである証拠にほかならず、儒家の理想は論理的に破綻しているという。堯と舜の両者をほめる孔子は、どんな盾も破る矛とどんな矛でも防ぐ盾を売る商人のようなものだ、というのが「矛盾」の笑話の言いたいことだったのだ。(『高校倫理からの哲学３　正義とは』岩波書店)

＊

性悪説を学んだ韓非は、儒家が道徳によって世を治めようとしたのに対し、法律による統治を説いた。「信賞必罰」によって統御する法至上主義である。